

平成30年度教育事業 夢冒険
真夏にチャレンジ ～『∞』の一步～



1. ねらい

- ①日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感や喜びを感じとらせ、自己肯定感を育ませる。
- ②基本的な生活習慣の確立や規範意識を高めさせる。
- ③異年齢での集団行動を通じて、仲間と協力する気持ちを培わせる。
- ④基礎体力の向上を図るとともに、自然の中で生きるために必要な知識・技能を養わせ、主体的に考え、状況把握し危機管理できる能力を身につけさせる。
- ⑤自然の雄大さやすばらしさに気づき、視野を広げさせる。

2. 実施日

平成30年8月5日(日)～8月12日(日) 7泊8日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 募集定員

24名 / 24名

5. プログラム (要約)

3年目を迎えた、曾爾から伊勢まで「歩く」、移動型キャンプ。新たな内容や活動を加え、『∞』の一步をテーマに、曾爾から伊勢まで続く道や川を辿り、そこにある「自然」「人」「歴史」を五感で感じ、自分たちの「足」で歩き、仲間と「力」を合わせて川を下り、仲間とともに様々な困難やチャレンジを乗り越えながら、約100kmの道のりを様々な手段を使って移動した。曾爾青少年自然の家から三重県にある伊勢神宮を経由して、今年度は二見の海を最終目的地とした。「歩いて曾爾(山)から二見(海)を目指す」という大きな目標の達成に向け、新たな挑戦や仲間づくり、自分を見つめる等、その日ごとのねらいをしっかりと設定するとともに、移動する活動の他に野外調理や洗濯など様々な体験活動を盛り込み、仲間とともに協力する場面、自分自身の力を発揮する場面を設けた。また、街道沿いに暮らす人々に質問や聞き取りをすることや、お伊勢参りの歴史や意味について学習する機会を設け、歩くことを通して様々なことを考え感じることが出来るプログラムとした。

スケジュール

日	主なスケジュール	距離(約)
5日	★仲間との出会い、仲間づくり 国立曾爾青少年自然の家(集合) 真夏にチャレンジはじまりの会 目標設定 地図づくり・歴史学習 夢冒険TIME(個人の目標発表) 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (奈良県宇陀郡曾爾村)	
	★地域を知る、仲間を知る、仲間との挑戦! 自然の家⇒伊勢地体育館 歴史探訪ラリー(御杖村) 夕食作り 夢冒険TIME(自己紹介ゲーム) 【宿】伊勢地体育館 (三重県津市美杉)	13km
7日	★歴史を感じながら「歩く」、自分を知る、自分に挑戦! 伊勢地体育館⇒リバーサイド茶倉 伊勢本街道の難所を踏破 夕食作り 夢冒険TIME(家族への手紙) 【宿】リバーサイド茶倉 (三重県松阪市飯南町)	24km
	★「歩く」、仲間との挑戦!仲間っていいね! リバーサイド茶倉⇒五桂池ふるさと村 夕食作り 夢冒険TIME(グループで振り返り) 【宿】五桂池ふるさと村 (三重県多気郡多気町)	19km
9日	★未知なる挑戦!仲間との挑戦!自分との闘い! 五桂池ふるさと村⇒中川大橋 川下り(宮川) (中川大橋～宮リバー度会パーク) 【仮眠休憩】度会中央公民館 (三重県度会郡度会町)	5km 6km
	度会中央公民館⇒伊勢神宮 《夜間歩行》	14km
10日	★仲間を見つめる、自分を見つめる。 伊勢神宮到着 仮眠 内宮参拝 伊勢散策(おかげ横丁) 夕食作り 夢冒険TIME(友だちのキラリ) 【宿】修養団伊勢青少年研修センター (伊勢市宇治今在家町)	4km
	★「海へ」ラストチャレンジ!ゴールの先に・・・ 修養団⇒二見奥玉神社 二見⇒自然の家(バスで移動) グループTIME(スタンツ練習) 夢冒険TIME(キャンプファイアー) 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (奈良県宇陀郡曾爾村)	12km
12日	★すべてに感謝、真冬のチャレンジへつなげる 道具の片付け グループTIME(リーダーからの言葉) 真夏にチャレンジ終わりの会 解散	
冬の「夢冒険」へつづく		

8月5日(日)【1日目】

奈良、三重、京都、和歌山から、小学校5・6年生12名、中学生12名の計24名が曾爾青少年自然の家が集まった。不安と期待を胸に、7泊8日共に活動を行う異年齢男女混合の1班6名の4班で、「夢冒険」真夏にチャレンジがスタートした。

曾爾から伊勢を目指すための準備として、伊勢街道の歴史やお伊勢参りの意味について風景街道「伊勢街道」連絡協議会会長の裏宗久氏にお話をいただいた。子どもたちは、「歩く」ことだけでなく、昔も今も変わらぬ伝統や文化を知ると共に、そこにある自然や歴史について、様々な視点で学ぶことができた。

つづいて、裏氏にも協力をいただき、曾爾から伊勢までの「地図」作りを行った。頭を寄せ合い、相談しながら、切り離された地図をつなげ、歩く距離や道をみんなで確認した。子どもたちは、完成した地図の長さを見て、自分たちが歩く距離に驚くとともに、未知なる挑戦に気持ちを引き締めた。



地図作りの後は、個人・班目標の設定、班の旗作り、歩くための準備などを行い、最後に、なぜ夢冒険に参加しようと思ったのか、夢冒険にかける思いなど、「自分の目標」を全員の前で発表した。

夢冒険初日、それぞれに、様々なチャレンジをしながら、仲間との距離を縮め、「曾爾から伊勢まで歩く」という大きな目標に向かって、参加者24名、曾爾ボランティア7名、職員8名の気持ちが徐々に一つになった。

8月6日(月)【2日目】

自然の家玄関前で子どもたちの司会・進行による「出発のつどい」を行い、晴天のもと、いよいよスタート。全員の顔に、「よし、頑張るぞ」という気持ちが表れていた。



御杖村に入ると、「御杖」の名前の由来を聞き取りしたり道標や灯籠・地藏さんなどについて調べたりしながら歩いた。街道沿いに住む人たちと積極的に交流しながら冒険を進めた。



丸山公園で昼食後、気温はどんどん上昇して、子どもたちの体力を一気に奪った。しかし、「あの日陰で休憩をとろう」「体育館まで残り1キロだよ」とみんなで声を掛け合い・励まし合って全員が笑顔で予定時間よりも早く伊勢地体育館に到着した。初日の歩行を終え、班の結束力は一気に高まった。一日目のゴールの瞬間、全員が、「この仲間となら伊勢まで100キロを歩き通すことができるぞ!」という思いを抱いたと思う。

体育館前の川でクールダウンを兼ねた水遊びをしてから簡易シャワーを浴びた。その後、各自で夢冒険ポロシャツの手洗いをを行った。「自分でできることは、進んで自分でする」ということが今回の夢冒険のねらいの一つで、洗濯もその一環である。初めて手洗いをするという子どももいた。ポロシャツをきつく絞ることに苦労する参加者が多く、家で家族に洗濯をしてもらうこと、洗濯機のありがたさを改めて感じていたことと思う。



一日目の夕食のメニューは、麻婆豆腐とサラダ。班の仲間と作る初めての食事である。「ぼく、ご飯炊くよ」「サラダは、どんな味付けにする?」「茄子はどうやって切る?」それぞれが何らかの担当を受け持ち、炊事が始まる。ご飯の炊く量も自分たちで相談して考える。「どれくらい食べるかな?」「うちは、家族4人で3合だったと思う。」「一人1合は多いね。」「9人分なら、7合ぐらいかな?」。何をしたらいいかわからず、友だちとふざけている子もいたが、すべきことが見つかりと動くことができた。初めての班での調理だったので、戸惑う場面も多くみられ調理や片付けに時間はかかったが、どの班も上手に調理をすることができた。本部にあるだし・ごま油・スパイスなどの調味料を上手く使い、キュウリを塩昆布漬けにするグループもあった。



夢冒険 TIME では、「自己紹介ゲーム〜ダウトを探せ!」をしてお互いの得意なこと・好きなことなどをクイズ形式で発表しあった。終わりの会で川柳などを発表し、20時に消灯、みんな疲れていたのだろう。すぐに体育館は静寂につつまれた。

8月7日(火)【3日目】

ヒグラシが鳴き始めた夜明け前の4時に起床。体育館に灯がともった。目をこすりながら寝袋などを片付け、荷物の整理をする。起き上がってはいるが、ぼうっと動かない参加者もチラホラ。それでも班ごとに朝食の準備をし、オープンサンド・バナナ・ジュースの朝食を済ませた後に片付けもして、最後に班ごとの装備や各自のカバンをトラックに積み込みをする。これだけのことを約1時間で行う。これが、毎日の日課・習慣となる。



5時から出発のつどいをして、24km先のリバーサイド茶倉を目指す。8日間の日程でこの日が一番長い距離を歩く。しかも難所の峠を2つ越える。子どもたちの顔も「よし、やるぞ!」「がんばるぞ!」という気合いに満ちていた。2日目も概ね晴れ、午後からは、厳しい暑さが予想された。できるだけ、

午前中の比較的涼しい時間に距離を稼ぐことを目標に歩き始めた。

急坂などの難所が多い反面、樹木に覆われた木陰も多いので、午前中は、予想以上に早いペースで進むことができた。道標やお地蔵様などを見つけ歴史を感じたり、湧き水や小川で体を冷やしリフレッシュしたりして気持ちよく歩き、森の中では、キツツキが木をつつくドラミングも耳にした。五感をフルに働かせて大自然に身を任せながら歩き、自分の体が自然の一部に成ったような気がした。



峠を越え、正午を過ぎると人家が増え始める。強烈な日差しを遮る物が無くなると、暑さにより体力が一気に奪われ、歩くペースが落ちる。しかし、まだ、ゴールまで10km以上残っている。「お昼ご飯はまだ?」「お腹がすいた」「足が痛いから、ちょっと休憩しよう」休憩の回数も増える。

昼食場所まであと約3km。さらにペースは落ちる。「今日のお弁当は何か?楽しみだね」「あと30分位で昼食場所に着くよ」「クイズしようよ」と足の痛みから話題をそらすように、班で楽しい話をしながら昼食場所を目指した。

「やったあ。学校が見えたよ」「お昼ご飯だあ」もう、早朝から7時間以上歩き続けていた。お腹もぺこぺこ状態だ。冷やし中華とおにぎりが、本当においしかった。全員が、ほぼ完食。



昼食場所から宿泊地までは、残り約6km。ゴールが少し見えた気がしてきたことも大きかっただろう。1時間前は足を引きずっていた子も昼食を食べ、休憩したことで完全に復活をした。ラスト6kmをどの班もいいペースで歩ききり、予定時間よりも早く宿泊地であるリバーサイド茶倉に元気に到着することができた。一緒に困難を乗り越えた同士として、班の結束力はさらに高まり、和気藹々とした家族の

ような兄弟のような雰囲気が生まれてきた。個々の地も出てきた。安心して自分を表現できる場所になった。もう、ずっと昔から知っている友だちの様である。

2回目の夕食作り。メニューは回鍋肉、フルーツポンチ、スイカ。1回目より格段にスムーズに作業は進んだ。自分の仕事・班の中での役割を見つけることができてきた。調味料を使って料理をアレンジしようという雰囲気もさらに高まっていた。子どもたちが、より生き生きとしてきたように感じた。



夢冒険 TIME では、家族への手紙を書いた。家を出発してまだわずか3日目だが、3日間の密度が濃いため、家を出たのがずっと昔に感じたのではないだろうか。全員が、真剣に集中して鉛筆を動かした。家族に伝えたい思いがたくさんあったようだ。

全員が集う場で、積極的に自分の思いや考えを発表する参加者も増え、終わりの会での川柳発表も少しずつ盛り上がりを見せってきた。

8月8日(水)【4日目】

4日目の朝、今朝も起床は4時。出発のつどいの健康自己チェックでは、この日もほぼ全員が「バッチリ絶好調」もしくは、「大丈夫、元気です」に挙手をした。しかし、2日間猛暑の中を歩き続け、ほぼ全員が何らかの体の痛みを抱え、慣れない生活で疲労も蓄積されていたに違いない。振り返ってみると、この4日目が、3日目以上に過酷な限界への挑戦であったのかもしれない。歩く距離は、1.9kmで前日より5km短く、アップダウンも少ないので体への負担は少ないが、日陰も少ない。この日も出発時間を1時間早め、昼食場所もこの日のゴール地点の五桂池ふるさと村に急遽変更し、一日の最高気温に達する前にゴールを目指した。



子どもたちは、常に2・3km先に設置された給水ポイントまで歩くことを直近の目標として足を進めた。給水ポイントでは、毎回サポート職員とボランティアが「いいペースだね」「がんばってるね」と満面の笑顔のハイタッチで迎えてくれた。正に裏方を含めスタッフ・参加者の全員で、この夢冒険を作っていた。「しっかり、スポーツドリンクを飲んでね」「水筒を満タンにしておきよ」と声をかけて、水分補給を促したり、「今日のお弁当は何だろう?」「ウナ丼かな?」「どんな弁当がいいの?」と、5分ほどの休憩だが雑談を楽しみ、たくさんのパワーをもらった。休憩後、毎回「行ってきます」「行ってらっしゃーい」と互いに大きく手を振って歩き始めた。



この日も全ての参加者・スタッフのがんばりにより、昼過ぎに五桂池ふるさと村に全ての班がたどり着くことができた。

昼からは、しばらく自由にゆっくりとした時間を過ごし、大きな湯船に浸かり疲れ切った体を癒した。そして、翌日からの新たな挑戦に備えた。



入浴後、いつものように洗濯をして、夕食作りにかかる。本日のメニューは、松阪のスーパーで買った国産牛（略して『松阪牛』）を使った料理。すき焼き、牛丼、焼き肉のように料理するか班で話し合っ決めて。もう、調理も手慣れたもの。班で協力してあっという間に、食卓ができあがる。「えっ、同じ材料なのに、班によって全然違うやん」、すき焼きあり、焼き肉あり、牛丼あり、チンジャオロース風あり。どの班も家族のように団欒を楽しんだ。



毎日、班で絵日記を書いてきたが、絵日記の内容にも、班の個性が表れてきた。歩きながらも「あっ、このこと今日の絵日記に描こうよ」と絵日記のことが話題となった。宿泊地に着くとスケッチブックを囲んでみんなで、ワイワイと談笑しながら絵日記に一日の活動を振り返りながらまとめた。

出発のつどい・終わりの会にも変化が見えてきた。司会・進行も上手になってきたし、挙手して発表できる参加者が増えてきた、全体の場面でも地を出せるようになってきた。班の中だけでなく、24人全体の場面も安心できる場所になってきたと感じた。24人が一つの固まりになってきた。



8月9日（木）【5日目】

「歩き」＋「川下り」＋「夜間歩行」と「夢冒険」のメインとなる日。

まず、川下りのポイントへ行くために、五桂池ふるさと村から約5km先にある、度会町の中川大橋へ歩いて移動をした。そして、そこからボートへと乗り換え、

宮リバー度会パークまでの約6kmをボートで川を移動した。



ボートはみんな協力しないと前に進むことができない。歩きながらも仲間の大切さや協力することの大切さを感じていた子どもたちだが、川下りを経て、さらに「協力すること」や「仲間を思いやること」の大切さに気づくことができた。

「1・2、1・2」と声をかけ合う班、班独自の号令で力を合わせる班、時には、川の流れてに負けて、対岸へ押し流されそうになったり、仲間と力が合わず、イライラしてしまったりと順調なことばかりではなかったけど、最終的には、どの班も協力して前に進むことができた、ゴールの宮リバーパークに全員無事に到着することができた。



川下りの後は、夜間歩行。疲れた体を休めるため、少し仮眠をとり、日が変わる11時に度会町を出発して、伊勢を目指した。



暗闇の中、今までの疲れを感じさせないほど、元気な足取りで、しっかりと前を見つめ、一步一步着実に足を進めた。

しかし、はじめは元気だった子どもたちも徐々に口数が減りはじめ、前に歩くことだけにすべての力をかけ、歯を食いしばり、一人ひとり自分と戦い、仲間と助け合いながら頑張る姿が見られた。



深夜2時過ぎ、伊勢修養団まで残り約3km 地点で最後の給水休憩をした。ここで思いがけないプレゼントを天からもらった。「ペルセウス座流星群」である。薄雲が晴れ、満点の星空が頭上に広がった。「あっ、流れ星」誰かが叫んだ。「えっ、どこどこ?」。その後、全員が、真夜中のスーパーの駐車場で大の字に寝ころび夜空を見上げた。数人が同時に「あっ、流れた!」と叫ぶ。「くっそお!」悔しがる声も聞かれる。私は、10分ほどの間に、5つの流れ星を見ることができた。夢を見ているような幸せのひとつときであった。

早朝4時前に、全ての班が、笑顔で伊勢青少年研修センター（修養団）に到着した。出発から約5時間、くたくたになりながらも、最後まであきらめずに自分の足で歩いた自信とやり遂げた達成感に満ち溢れ、すがすがしい顔で、仲間とハイタッチをした。入浴後、長い一日が終わり、久しぶりの布団で全員（スタッフも含め）が泥のように眠った。



8月10日（金）【6日目】

お昼まで睡眠をとり、午後からは、班の仲間と内宮参拝とおかげ横丁の散策を行った。お小遣い1, 800円を使い、「伊勢うどん」を食べたり、家族へのお土産を買ったり、仲間と楽しく過ごした。また、「リーダーからの挑戦状」というおかげ横丁に関する謎解きクイズに挑戦しながら散策をした。そのクイズラリーの結果で、夕食のメニューであるカレーの食材を獲得した。



この日が、最後の夕食作りだった。メニューはカレーとサラダ。カレーには、チーズやアボガド、こんにゃく、油揚げなどボーナス食材が各班2品ずつ加わった。さらに様々な調味料を駆使して、辛い味にしたり、ドライカレーにしたりした班もあり、班の個性が表れた。この日の夕食は、完全に子どもたちだけによって作られた。



夢冒険TIMEは、「キラリをさがせ!拡大版」をした。毎日の終わりの会の中でも「キラリをさがせ!」というコーナーで、友だちのいいところ、がんばっていたところ、してもらってうれしかったことを付箋に書いて、発表し合っていた。その拡大版で、改めて友だちのこを見つめる時間として、今まで、書きためてきたメッセージを直接相手に手渡すこともした。仲間からもらったメッセージを少し照れくさそうに、でもすごく嬉しそうに読んでいた。このメッセージの交換は、最終日の閉会式まで続いた。



終わりの会での川柳の発表は、この日が最後であった。前日の川下りのこと、夜間歩行のこと、流星を見たこと、カレー作りのこと、伊勢散策のことなど次から次へと子どもたち・スタッフからも川柳が発表され、「うまい!座布団3枚」とさながら笑点のような盛り上がりを見せた。1日目に自然の家で行った緊張でガチガチ状態だった終わりの会が嘘のようであった。この場面においても子どもたちの大きな成長を感じた。



8月11日(土)【7日目】

歩き始めて6日目、いよいよ最終目的地である二見海岸の海を目指す。残り12kmである。出発前、スタッフの間では、「子どもたちの歩くことに対するモチベーションは、前日の夜間歩行のゴールがピークで、維持できているだろうか?」という不安がよぎったが、それは杞憂に終わった。



出発のつどいの中から、全員の表情がとてもよかった。5段階評価の健康自己チェックは、今までで一番よく全員が「バッチリ絶好調」だった。「よし、海まで歩かず!」「100kmのゴールをするぞ!」という強い決意が感じられた。また、「俺たちは、今までに一日で24kmも歩いてきたんだ」「夜中も朝まで歩き通した」「信頼できる仲間がいるんだ」という積み上げられた自信がそうさせたのかもしれない。



今までは、スタートするとすぐに班と班の間隔があいてしまいましたが、この日は、ほぼ4班が固まって、しかも誰一人遅れることなく、快調なペースで歩くことができました。この日も快晴で、熱中症になることが懸念されたが、誰一人、体調を崩すことなく歩いた。海が近づくと道端の用水路にも海に棲息するカニが大量に姿を見せて、子どもたちは興奮した。子どもたちは、周りの景色を楽しんだり、友だちとの会話を楽しんだりする余裕があった。また、歩きながら、今晚行うキャンプファイヤーの出し物の相談もした。ある班は、出し物の歌を大きな声で歌いながら歩いた。まだまだこの先、どこまでも歩いていけそうな雰囲気だった。





小さな林を抜けると、景色は一変してコンクリートの堤防が現れた。海は見えないが波の音が聞こえる。子どもたちは、堤防を駆け上がった。「やったあ！海だ」「ついに海まで歩いた」あの曾爾の山奥から、いくつもの峠を越え、いくつもの橋を渡り、ついに海へたどり着いた。海岸線沿いに視界は開け、2km程先のゴールの二見興玉神社の幟も見える。この2kmは、まったく遠く感じさせない。むしろ、この100kmを頑張っ



て歩いてきたご褒美・ウイニングランのような気もする。子どもたちの表情もすごく和やかで喜びに満ちている。海岸線を歩きながら、この楽しい瞬間がずっと続いてほしいと感じたぐらいである。

昼食場所の松林に全班ほぼ同時に到着した。予想以上に早く到着することができたので、30分程自由時間にすることにした。目の前は、他にだれもない砂浜、きれいな貝殻を拾ったり、裸足になって波と戯れたり、瓶につめる砂を採集したりした。



昼食後、二見興玉神社で参拝をして、全員が笑顔で100km踏破の目標を達成した。

バスで自然の家に帰り、グループTIMEで絵日記を描いたり、キャンプファイヤーの出し物の準備・練習をしたりした。

「夢冒険」真夏にチャレンジ最後の夢冒険TIMEは、キャンプファイヤーで大きな火を囲み、班の出し物をしたり、ゲームをしたり、歌を歌ったり、ダンスをしたり、今日までの夢冒険の思い出をふりかえりながら、仲間とともに楽しい時間を過ごした。



班の出し物は、「夢冒険の歌の替え歌」「あいうえお作文」「絵日記の発表」「カエルの歌の替え歌（輪唱）」などそれぞれの班の活動や様子を生き生きと発表した。

最後の夜、思い出話やこれからのことを話しながら、仲間との時間を惜しみ、就寝した。

8月12日（日）【8日目】

8日間様々なチャレンジを乗り越えてきた疲れも感じられないほど、全員、元気に最終日の朝を迎えた。

真夏のチャレンジとして、仲間と過ごす最後の時間をかみしめながら活動をした。



最後に、一週間利用してきた寝袋やマットを干したり、鍋や食器など道具を片付けたりした。

長いようで、短かった8日間のチャレンジ、いろいろな困難や苦しみを乗り越えながらも全員が一つの目標を達成できたことは、子どもたち一人ひとりの自信になったとともに、大きな成果となった。



真冬にチャレンジまで、約5ヶ月それぞれの場所で目標を持って過ごし、さらに成長した姿で再会できることを約束して別れた。



6. まとめ

移動キャンプ3年目で総まとめの年である。昨年度は台風の為、行程の後半部分しか歩くことができなかったため、本年度は6日目までは、昨年度と同様のプログラムを実施した。そして、7日目にさらに海まで歩くチャレンジを付け加える形にした。前半約60kmの『歩行』、途中、ラフティングボートによる約6kmの『川下り』、14kmの『夜間歩行』、そして「伊勢散策」とラスト「海を目指し」で20kmの『歩行』、合計100kmを6日間で踏破した。仲間と協力し、前へ前へと歩みを進め、全員無事に二見（海）にゴールすることができた。また、この夏は大変な猛暑で熱中症や暑さによる疲労を心配した。そこで当初の予定より出発時間を1時間早め5時に出発をしたり、昼食場所をゴール地点に近づけたりして、午前中にできるだけ距離を稼ぐスケジュールに変更した。無理のない歩行距離、給水ポイントの設定、複数の救護車両・サポート体制など、安全を第一に考え、様々なことを想定した対策を講じたことで、大きなトラブルもなく全員が歩き切ることができた。

夢冒険としてのねらい、個人・班のねらいをしっかりと掲げ、毎日出発前にそれらのねらいや目標を確認することを大切にした。そして、活動の後には、その日の出来事や自分自身の気持ちの変化や思いをしっかりとふりかえり、明日につなげるようにした。ふりかえりやまとめの時間を大切にすることで、自分の気持ちや体調の変化に気づくとともに、仲間の気持ちや様子も知ることができ、自分や仲間を見つめる良い機会となった。

「∞の可能性」を信じ、目標を達成したことは、子どもたち一人ひとりにとって大きな自信となり、心に残る体験・経験になったと考える。子どもたちからは、「新しい自分を見つけられた」「自分の限界を知ることができた」「挑戦することは大事だと改めて思った」「自分から仕事をするようになった」「自分から話しかけられるようになった」「たくさんの人に助けられて生活していることが分かった」「ボランティアとしていつか参加したい」というような感想が多く聞かれた。

「できた」「やれた」達成感を目に見える形で感じ、また、「曾爾から二見（海）まで歩いた」という現実が形として残ることは、子どもたちの自己肯定感にも大きく影響すると考える。

次は、真冬にチャレンジ！子どもたちの冒険はまだまだつづく。（企画指導専門職 田中 耕司）



成30年度教育事業 夢冒険

真冬にチャレンジ〜一歩から広がる『∞』の可能性〜



2. ねらい

- ①日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感や喜びを感じとらせ、自己肯定感を育ませる。
- ②基本的な生活習慣の確立や規範意識を高めさせる。
- ③異年齢での集団行動を通じて、仲間と協力する気持ちを培わせる。
- ④基礎体力の向上を図るとともに、自然の中で生きるために必要な知識・技能を養わせ、主体的に考え、状況把握をし、危機管理できる能力を身につけさせる。
- ⑤自然の雄大さやすばらしさに気づき、視野を広げさせる。

2. 実施日

平成31年2月9日(土)～2月11日(月・祝) 2泊3日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

※真夏にチャレンジに参加した者

4. 参加者 / 募集定員

22名 / 24名 (真夏にチャレンジ参加者)

※体調不良等により2名不参加

5. プログラム (要約)

『∞』の可能性をテーマに、真夏にチャレンジの体験や経験を活かし、冬の自然の素晴らしさや厳しさを自ら体験し、そこにある「自然」「人」「歴史」に触れ、仲間とともに、冬の三峰山登山、極寒でのテント泊生活などの様々なチャレンジを重ねた。

夏のキャンプを振り返るグループタイム、なかまと相談して鍋材料を購入して作ったオリジナル鍋作り、雪山登山、キャンドルファイアー、テント泊、焚き火などの活動を盛り込んだプログラムを通して、曽爾周辺の大自然にふれると共に、自分やなかまと向き合った。

また、夏の経験や自信が活きるよう、自主的、主体的に活動ができるプログラムの中で、仲間と共に協力する場面、自分自身の力を発揮する場面を設け、自分自身で考え行動できるよう活動や支援を行った。

スケジュール

2月9日(土)

《夏からふりかえる、集結》

鍋材料の買い物

グループタイム～夏からを振り返って～

夢冒険タイム

(冬山へ向けて、クッカーの練習、アイゼンの装着)

テント設営

夕食作り(オリジナル鍋を作ろう)

焚き火を囲んで

テント泊

2月10日(日)

《冬の大自然・新たな挑戦》

三峰山登山

温泉

キャンドルファイアー

グループタイム～家族からの手紙～

テント泊(自分で選択)

2月11日(月・祝)

《明日へのチャレンジへつなぐ》

テント撤収

亀山登山

物品の片づけ

グループタイム～明日へのチャレンジ～



2月9日(土)【1日目】

真夏にチャレンジから6カ月、夏のチャレンジを共にした仲間と近鉄榛原駅で再会をした。

最寄りのスーパーマーケットに移動して、まず、夕食の鍋作りについて相談をした。予め各自で食べたい鍋のメニューとその食材を書き出した「鍋メモ」をもとに少し緊張しながらも和気藹々と相談した。年長の中学生がリーダーとなり話し合いを進めた。寄せ鍋、おでん、しゃぶしゃぶ、カニすきと鍋の方向性だけを決めて、電卓を片手に食品売り場に向かった。「白菜は、どの位いるかな。」「このカニ半額だよ。」「うどんは、何玉食べる?」「この鯛一匹買おうよ。」などと話し合いをしながら、売り場を約1時間動き回った。どの班も一人当たり500円の予算内で鍋の具材、飲み物、デザートなど上手に買い物をした。「おいしい鍋を作ろう」という共通の目標をもとに買い物を一緒にすることが絶好のアイスブレイクとなって、半年間のブランクも埋まったように感じた。

自然の家に着いてから、開会式、夢冒険の歌の練習、グループタイムなどを行った。グループタイムでは、夏からの活動を振り返り、この半年間に各自ががんばったこと・成長したこと、逆にがんばれなかったことなども出し合い、それを基に、この3日間の自分の目標、班の目標、約束事を考えた。

鍋作りは、はつらつ広場に自分たちで立てたテントを中心に行った。洗い場など水場が遠い悪条件にも関わらず、どの班も手際よく調理を進めた。夏の経験が生かされていると感じた。また、自分たちで選んだ食材ということもあり、残食もなく、きれいに食べることができた。鍋作りと平行して、班毎に焚き火台での焚き火を楽しんだ。焚き火の炎を囲んで、鯛しゃぶを楽しんだり、焼マッシュマロ・焼チーズを楽しんだりした。鍋を囲みながらの食事は、話もはずみ素敵な時間が流れた。

夜は、時折雪も舞う氷点下のなか、肩を寄せ合ってテントで寝た。

2月10日(日)【2日目】

朝の気温は氷点下4度であったが、全員がテントで元気に朝を迎えることができた。はつらつ広場で焚き火を囲みながらパンとスープの朝食を取った。出発のつどいでは、参加者による司会進行のもと「エビカニ体操」「夢冒険の歌」「めあての発表」「円陣」を行い、三峰山に向けて出発した。



三峰山は、麓から雪が積もっていたので、出発時に全員がアイゼンを装着した。雪の感触を楽しみながら、小道を進んだ。途中で不動の滝を眺めたり、氷柱で遊んだり、各班のペースで山頂を目指した。山小屋を過ぎると、今までの杉木立の景色から一変して、霧氷を着飾った天然林の美しい景色となった。「うわあ!すごい。」「むっちゃ、きれい!」「この霧氷すごく厚い。」と歓声を上げた。また、登山者とすれ違うことも増え、「こんにちは。」と自分から先に、元気に挨拶する場面も増えた。八丁平で、カップ麺の昼食を食べた後、短時間ではあるが、ソリ遊びや雪合戦も楽しんだ。下山予定時刻を大幅に過ぎてしまった班もあったが、全員が無事に下山できた。ゴール地点でご褒美のお汁粉でお腹を満たした後、温泉で体を温め自然の家へ戻った。



夕食後のグループタイムで班毎にキャンドルファイアーの出し物の最終練習を行い、キャンドルファイアーに臨んだ。全員が踊って歌って最後の夜のキャンドルファイアーを楽しんだ。参加者の顔には終始笑顔が溢れていた。キャンドルファイアー後のグループタイムで、参加者は保護者からの手紙を読んだ。心のこもった手紙に、全員が胸を熱くした。

2日目の夜は、テントで寝るか宿泊棟で寝るか自分で選択をして、22人中12人がテントで寝た。

2月11日(月・祝)【3日目】

最終日の朝、起床するとすぐに「来たときよりも美しく」を合い言葉に宿泊棟やテントの片付けなどを主体的に行った。はつらつ広場で朝食後、亀山登山を行い、亀山山頂から自然の家周辺の眺望を楽しんだ。

大鍋での煮込みうどんをはつらつ広場で食べた後、最後のグループタイムで、3日間の活動を振り返り、これから新たにチャレンジしたいことを話し合った。そして、各班の代表者が閉会式で発表した。



6. まとめ

はつらつ広場でテント泊と焚き火を囲んでの鍋料理、八丁平で苦労してお湯を沸かして食べたカップ麺の味、三峰山山頂の霧氷の美しさは、一生忘れることのできない思い出となっただろう。そして、それを共有した仲間との出会いも一生の宝物である。

夏の活動でつけた「自信」が、この冬の活動で「確信」に変わった。この自信をもとに参加者が今後さらなる活躍・飛躍をすることを願っている。

(主任企画指導専門職 田中 耕司)